武蔵野日曜聖書講筵

クリスティアノス
――使徒行伝第11章19～30節――

１９８９年11月12日
小池辰雄

伝道の下準備　キリスト者　自己義認　自己批判　内村山脈の自己批判　十字架の土台に聖霊がくる　ルターのロマ書序文　肉と霊　詩「人は誰しも」　参考「キリスト者の自由　聖書への序言」

【使徒11】

19 斯てステパノによりて起こりし迫害のために散らされたる者ども、ピニケ、クプロ、アンテオケまで到り、ただユダヤ人にのみ御言を語りたるに、20 その中にクプロ及びクレネの人、数人ありてアンテオケに来たりし時、ギリシヤ人にも語りて主イエスの福音を宣伝う。21 主の手かれらと偕にありたれば、数多の人、信じて帰依せり。22 この事エルサレムに在る教会に聞こえたれば、バルナバをアンテオケに遣わす。23 かれ来りて、神の恩恵を見てよろこび、彼等に、みな心を堅くして主におらんことを勧む。24 彼は聖霊と信仰とに満ちたる善き人なればなり。爰に多くの人々、主に加わりたり。25 斯てバルナバはサウロを尋ねんとてタルソに往き、26 彼に逢いてアンテオケに伴いきたり、二人ともに一年の間かしこの教会の集会に出でて多くの人を教う。弟子たちのキリステアンと称えらるる事はアンテオケより始まれり。

27 その頃、エルサレムより預言者たちアンテオケに下る。28 その中の一人アガポと云うもの起ちて、大いなる饑饉の全世界にあるべきことを御霊によりて示せるが、果たしてクラウデオの時に起これり。29 爰に弟子等おのおのの力に応じてユダヤに住む兄弟たちに扶助をおくらん事をさだめ、遂に之をおこない、バルナバ及びサウロの手に托して長老たちに贈れり。

●伝道の下準備

もう、相手がクリスチャンであろうがなかろうが、今日の結婚式の披露宴でも私ははっきり言います。御利益もダメ、観念もダメ。本当の福音とは、本当のクリスティアノスというのはどういうのかと。今日の「クリスティアノス」というのはパウロが伝道したアンテオケの異教徒たちですよ、異教徒がユダヤ人よりも本当のクリスティアノスになったわ

けだ。

では、段々やっていきましょう。

19斯てステパノによりて起こりし迫害のために散らされたる者ども、ピニケ、クプロ、アンテオケまで到り、ただユダヤ人にのみ御言を語りたるに、20その中にクプロ及びクレネの人、数人ありてアンテオケに来たりし時、ギリシヤ人にも語りて主イエスの福音を宣伝う。

初めは、ユダヤ人にだったけれども、今度は異邦人に向かってきたというわけです。

21主の手かれらと偕にありたれば、数多の人、信じて帰依せり。22この事エルサレムに在る教会に聞こえたれば、バルナバをアンテオケに遣わす。

エルサレムは、ユダヤ人で特にキリストの弟子のペテロ、ヨハネ、ヤコブが中心です。その本山、エルサレム教会はまだユダヤ教的な要素がかなり残っている。純粋にキリストで行くのはこのパウロの方です。バルナバというのはクプロ島の出なんです。

23かれ来りて、神の恩恵を見てよろこび、彼等に、みな心を堅くして主におらんことを勧む。

「主におらんことを」というのは結構なことですね、「エン・クリスト」ということです。

24彼は聖霊と信仰とに満ちたる善き人なればなり。

これはバルナバです。ステパノは第一人者ですけれども、バルナバもそれに類する人だった。

爰に多くの人々、主に加わりたり。25斯てバルナバはサウロを尋ねんとてタルソに往き、

パウロは曠野に行ってから、自分の生まれ故郷の小アジアのキルキヤのタルソに戻って、ここに7、8年いたんです。だから、パウロは、本式の伝道に向かう前は非常にじっくりとキリストの福音を、キリストの光をもって旧約を読み返したわけです。パウロは預言者を、特にイザヤ書でしょうね、キリストの光で読みなおしたわけです。

「なるほど、これは本当にキリストの預言だ」

ということが分かった。そういう下準備をしていた。内村先生も

「30歳までは動くな。若くてすぐ伝道にでかけるな」

と、いつか言っておられた。とにかく、何事も、若い方も、じっくりと準備をすることです。それから、時は神さまが、時満つれば、

「出でよ、動け」

と仰るわけです。

私は36歳から集会を始めた。特に語学の勉強は20代がいい。歳を取ったらだめだということではないけれども、記憶は非常に20代は速いからね。歳をとるにつれて、段々判断力が強くなってくる。ずいぶん僕も語学は欲ばったものな。ヘブライ語、ギリシヤ語、ラテン語、その他いろいろ不思議な本が昔は相当集まった。それはやってられないからやめま

したけれども。今は一番大事なのは、私は日本語なんです。

●キリスト者

バルナバはサウロ即ちパウロを尋ねてタルソに行った。

26彼に逢いてアンテオケに伴いきたり、二人ともに一年の間かしこの教会の集会（あつまり）に出でて多くの人を教う。

「教える」という言い方は私はあまり好きではない。伝道したんだ。「伝道」というのはいい言葉ですよ、道を伝えるというのは。「宣教」というのは私は嫌いだ、教えを宣べるというのは。教会の方ではよく「宣教」という言葉を使うけれども。道を伝える、伝道の方がいい。申し上げているとおり、日本人は道の民だからね。キリストは、

「我は道なり」

と仰った。「我は教えなり」とは仰らない。真理を身につけることを道という。身についてないものはみな消えてしまう。身体だよ、要するに。

弟子たちのキリスチアンと称えらるる事はアンテオケより始まれり。

「クリスティアノス」の複数形は「クリスティアノイ」という。アンテオケの教会は異邦人が主であるところの教会です。その頃の「異邦人」というのは大体ギリシヤ系の人で、ギリシヤ語を語る連中です。

第十巻の「11月12日　キリスト者」の項を読みます。

「かくてバルナバはサウロを尋ねんとてタルソに赴（おもむ）き、彼に逢いてアンテオケに伴いきたり、二人とも一年の間かしこの教会に共に集められて幾許（いくばく）かの群を教う。弟子たちのクリスティアノス（キリスト者）と称えらるる事はアンテオケより始まれり。」（使徒行伝11・25～26）

「バルナバ（原義「慰めの子」）はその名の如く使徒たちに協力して慰安ともなり、仕手（して）役を充分つとめたパウロ的信仰の人であったから右掲の如くパウロをアンテオケに伴れて来た。当時このオロンテス川沿いのアンテオケはエジプトのアレキサンドリヤに劣らぬ小アジア半島のつけ根に位置する港市であった。ユダヤ人やギリシヤ人が、ピニケ、ツロ、シドン、クプロス島等から信仰を求めて集まって来た。ステパノの殉道が狼火（ろうか）となったのである。バルナバは勿論聖霊の人であるから、アンテオケに於けるパウロとの一年は異邦伝道に最初の成果をもたらした。人々は彼らをクリスティアノス（複数クリスティアノイ）と称した。クリスティアン（英語）はこれに由る。超ユダヤ教徒だからクリスティアノスの名がアンテオケ・エクレシヤ（教会）の信徒につけられたのは当然のことであった。要するにキリスト者の濫觴（らんしょう）である。

ルターの宗教改革によって、「プロテスタント」（反抗者）と呼ばれる新教徒が生じたのもこれに類し、ルターのロマ書序文に感動し、モラヴィア教団の影響も受けて、聖

霊体験をして立ち上がったJ．ウェスレーのホーリネス・クラブ一団の在り方から「メソディスト」という名称がつけられたのも之に類する。」

●自己義認

それで、パウロはもう純粋に

「人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ」（ガラテヤ1・1）

と言って、ダマスコ途上の体験が何といってもグルント（基礎）です。そこで完全に彼はひっくり返った。「キリストのもの」とは、キリスト者とは所属だね。キリスト者もたくさんいる。それではどれが本ものかと。人が人のことを、本ものかうそかなんて、そんなことを言う必要はない。

「自分自身が本ものであるということの自覚は何によるか」

ということです。ギリシヤ語ができ、ヘブライ語ができて、よく聖書が分かったから本ものかと。そうはいかん。そんなものはひとつも本ものの資格にはならない。本ものの一番の例はパウロ自身です。パウロの伝道、パウロの書翰、これは本当に本ものです。

「おれは本ものだ」

とは彼は言ってませんよ。けれども、これは本ものです、何といっても。パウロの右に出る者はいない。復活のキリストにひっくり返された。キリストはこの男を捕まえて、

「こいつを本ものにしてやろう。今はユダヤ教の本ものだけれども今度は福音の本ものにしてやるぞ」

と。ユダヤ教の本ものの時はパウロは、

「律法の義につきては我は責むべきところなし」

と、自分は本ものだと思った。

「自分は律法を本当に守っている。拳々服膺（ふくよう）している。非難されるところはない」

と、驕（おご）っていたわけだ。ところが、この福音の世界にきて、

「あの義はとんでもない驕りであった。本当は神さまに直結していなかった。律法にこだわっていただけの話だ」

と、高慢であることが分かったんだ。彼は傲慢であった。己を義とした。自己義認です。実はそれは「罪」だということを、キリストを受けとってから、初めて知った。

「ああ我、悩める人なるかな。この死の体（からだ）……」

というローマ書7章の叫びは、本ものになってからの叫びです。人間というものはこういうものなんだと。ローマ書7章は救われる以前の告白ではない。救われてから、人間というものはこういうものだということを代表して言っている。誰でもローマ書7章を持っているわけです。救いを要しない人は一人もいない。ということは、

「万人は本来、宗教人だ」

ということです。宗教から、本当の宗教、福音からはずれている。非常に律法については立派である。ところが、キリストから言うと、それが本当は偽善なんです。いわゆる我々が普通に使っている偽善とは違う。いわゆる律法を外側から守って、大いに善しとしているのはいつわりの善なんです。

●自己批判

そのことはルターも『クリスチャンの自由』と『ロマ書序文』で非常に言っている。『クリスチャンの自由』は素晴らしい本だけれども、『ロマ書序文』もほとんど『クリスチャンの自由』を補っている。ある意味においては、『ロマ書序文』の方が大事だとも言えないこともないくらい大変なものだ。ルターはたくさんの序文を書いている。ここに置いてあるこの大きなドイツ語の聖書にもれなく出ている。こんなに全部出ているのはおそらく他にないだろう。その中で『ロマ書序文』が最たるものです。『イザヤ書序文』も凄いよ。暇があれば、序文だけを全部訳したらいいんだけれども、私はもうそういう暇はないからできない。とにかくルターは大変なひとです。

カトリックの信仰はユダヤ教にちょっと似たところがある。カトリックの宗教構造――「ヒアラルヒー」というんですが――その構造は福音的ではない。そんなものは要らない。しかし、ああいうヒアラルヒーがあるので、それだけ大きな組織なんです。それで、いろいろな事業もできるし、今までずうっと続いた。そういう功績はもちろんあります。人間のすることはみんな相対的に、ある点では善さというものは持っている。どこかが悪いというと、何もかも悪いと判断するような、そういう判断の仕方をしてはいかん。こないだの私の詩に『人は誰しも』（召団讃歌A55、１９８９年8月20日作）というのがあるでしょ。あれなんです。あのような角度でいかなければね。

ルターはカトリックの中にいて、特に「免罪符」の問題から、「これは違うぞ」ということになった。これは、マルチン・ルターのことを私が書いた本（著作集第七巻『聖書の人ルター』）があるから、あれを皆さんお読みになれば、よく分かります。私は昨日少し読み返してみて、まぁよく書いたなぁなんて正直思った。ここで今日はそれをゴタゴタ言いません。時々、ルターのことは読んでください。あの中に『ロマ書序文』を訳しておけば良かったけれども。

とにかく、ルターは「プロテスト」した。「反抗」という言葉はあまり好きではないけれども。免罪符の問題から、それが信仰の本質問題になって、とうとうカトリックと別れざるを得なくなった。プロテストということは、別な言葉でいうと、自己批判、「クリティーク」なんです。本当のプロテストはクリティークなんです。カントの『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』、これはみな批判だ。あるものを検討して、真理に即しようとして、ものを言うことが批判なんです。主観的に言ってはいけない。どこまでも、自分ではない。

真理を立てて、

「真理はかくあるべし」

という角度から批判していく。その批判も間違っているかも知れない。とにかく、絶えざる批判でいく。これが進展していくゆえんなんだ。批判というのはいわゆる批評ではない。批判精神がなければ学問も進まない。

この福音の世界では、それが今度は自己批判なんです。己を批判する。カトリックという一つの組織体の自己、己というものを批判してかかったら、その一つの現象としては免罪符のことになった。免罪符の問題をきっかけにしてやったら、これは大きな間違いだと批判した。それで、ルターは

「プロテスタント」「反抗者」

だと言われた。反抗者という言葉はいい言葉ではない。「プロテスト」（反抗）はいい言葉ではないけれども、批判、「クリティーク」（批判）は大切なことなんだ。ルターは本当の批判者です。しかも、カトリックという自己、己を批判した。

「どうですか、これは議論しましょう」

と、議論の提題をしたわけだ。反抗でも何でもない。

「真理に即そうとして真理を愛するためだ」

と、そのことはちゃんと序言に書いてある。

●内村山脈の自己批判

これはカトリックのことですが、今度は、我々のプロテストです。プロテスタントそのものが今度は観念化したり、御利益化したり、いろいろなことになる。今度はプロテスタントに対するプロテストをしなければいかん。プロテスタントに対するプロテストをしたのは内村鑑三なんだ。そして、

「無教会主義」

というイズムが出てきた。今度は、無教会主義がどうも硬化現象を起こしている。内村先生は弾力性のある方でしたけれども。それでもなお、内村先生でもまだ手前だった。誰だってそうだよ、人間は。

内村鑑三の流れを内村山脈と言ってもいい。内村山脈という言葉は天野貞祐先生が使っている言葉です、

「自分は内村山脈の一人だったけれども」

なんて言われた。天野先生の『内村鑑三』という文章は素晴らしい。よく本質をついてます。かえって、お弟子さんよりか、あの天野先生の論文の方がいい。

私は内村山脈の中にいた。私も内村山脈の自己批判をしたわけだ。そうしたら、出てしまった。私は聖霊を受けたら、出されもしたし出もした。どうも祈りの世界がおかしい。足り

ない。ごもっともな祈りですよ、無教会の皆さんは。結構なお祈りをします、整ったお祈りを。決して悪くはない。私もその中の一人だったんだから。藤井先生の集会にいた時もちゃんと決して観念でない祈りを、心の祈りをしてました。それでも、何か本当の力がこない。これは何かまだ足りないと、私も自己批判した。無教会でも何か足りない。結局、私は無教会の中にいて自己批判したわけです。

１９５０年の11月3日から5日にかけて、私は手島さんと一緒に集会した。手島さんは

「ぜひ一緒に集会してくれ」

と、熊本から私を呼んだから、私は出かけて行って、二人で集会の講師をやって、私は詩篇の話をした。その時の祈祷会でもって、上から聖霊が来た。それで私もひっくり返された。ぶっ倒れた、全身しびれた。聖霊のバプテスマを受けた。そうしたらば、

「なるほど無教会はまだ聖霊以前だった」

ということが分かった。聖霊が全然無かったとは言えないでしょうけれども、とにかく、本質的にはまだ以前だった。それで、はっきりしてきたのはこの御霊の世界です。

無教会では十字架一点張りで、しかも、これも観念だった。聖霊を受けると今度は逆に、この十字架が強くなってきた。パウロがそうだ、十字架なんておよそ考えていなかった。

「これは悪人の象徴だ。とんでもない。あんな十字架にかかったキリストなんかを信じている奴らはやっつけてしまえ」

というわけでしょ。

●十字架の土台に聖霊がくる

それで、我々は十字架が土台で、この土台にこそ聖霊がくるということをはっきり言っているわけです。我々の召団のマークは

「㊉」（「十字架・聖霊」、〇の中に十）

です。

この世界に入ると、聖書が本当に読めてきた。旧約のイザヤ書の凄さも、福音書、パウロの凄さも身体で読めてきた。それで初めて、これは本ものだなぁということが分かった。相対的な小池は本ものではないですよ。

「十字架・聖霊で救われているところのこの現実は本ものである」

と言っているんです。ルターも言っているんだ、

「我々は死に至るまで罪びとに過ぎない。しかし、義とされている。そういう矛盾構造なんだ」

と。「義とされている」では、私は承知しないから、私は

「義を賜っている」

と言っている。義化される、義を賜っている。本当に義化されるのは天界に行ってからの

話ですけれども、義化がもう始まっているわけです。我々は朽つべき肉体を持っている。その中に霊体の核が、霊核がきている。だから、「死んでも死なない」という自信があるわけです。これは誰が何といっても、これを否定するわけにはいかないという所まできてしまうわけです。

相対的な実存とか存在というものは、お互いさまみんな「人は誰しも」という世界だよ。いわゆる五十歩百歩ということだ。けれども、キリストに在って、キリストの光が、知恵が、愛が、生命が上から来ている。これはしょうがない。その人が、どんなに実存が躓いたり転んだりであっても、あそこには

「本ものが来ている」

ということが言えるんです。生まれつき非常に性質のよい人は楽なんだ。ところが、生まれつきやっかいな面をもったやつは、躓いたり転んだりする。

「それでもあそこには本ものが光っている」

ということが見えるわけです。そういうことでその人を見てないと、見損なう。自然に一対一の伝道になってしまう。あなた方もやってくださいよ、一対一の伝道をね。止むにやまれずして語らざるを得ない。

「語らざればわざわいなるかな」

です。もちろん、単なる言葉じゃない。

パウロの福音を本当につかまえて証したのは、何といっても、宗教改革者となったマルチン・ルターです。カルビンというのも凄い。カルビンは異言の体験もしている。ルターもしてるはずだ。ルターのそれを読んだことはないけれども。まぁ、異言が出る出ないはどうでもいいが。

●ルターのロマ書序文

プロテスタントといわれたルターの『ロマ書序文』をちょっと紹介しておきましょう。私が『ロマ書序文』というのを教科書で書いたのがあるから――ドイツ語が少しお分かりの人は註解のところを見れば分かる――欲しければ上げます。

「ところで、律法を満たすとはどういうことか。それは楽しみと愛をもって自分のわざをなす。それでなければ律法は満たされない。

律法というものは、楽しみと愛がなくて、「仕方がない」と言って、しかめっつらして一生懸命でやったって、それは律法を満たしたことにならない。

心の奥底から楽しみと愛をもってわざをすれば、それは律法を満たすことになる。本当の信仰の世界はそうなんだ。

あたかも律法がないかの如くに、神的に

神的にというのは、神の御意に沿って、即してということ。

そして正しく生きる。懲罰がないかの如く。自由な愛からのそのような楽しみというものは、聖霊が心の中にもたらす。」

さすがはルターだね。聖霊がくると、そういった楽しみと愛は自然に出てくるんだという。だから、まるで律法がないかの如くにして満たしてしまう。さすがは、ルターはよく自分の体験でものを言ってます、頭でこんなことは書けない。うれしくてしょうがないんだと。

シラーが

「本当の人間の世界は遊びだ」

と言ったのは、これが本当の遊びの境地なんです。勉強もそうなんだ。

「私は英語がちょっと困ったな」

なんていうのではなく、

「いや、御飯を食べるくらい英語が楽しい」

と、そうなると本ものになる。始めは苦しくたってしょうがないけれども、何でも楽しみが――楽しみのためにではない、目的ではない――楽しみがおのずから生ずるような境地が本ものだというわけです。人を助けることも、恵むことも、何をするにも、すべてがもうまるで歌をうたっているようなものだと。そういう人には本当にかなわないよ、くってかかろうとしたって。この言い方はむしろ『クリスチャンの自由』よりか『ロマ書序文』の方が深い。

「聖霊というものはキリストに対する信仰において、信仰と共に、信仰を通して与えられるものであって、神の言葉即ち福音、それはキリストが語ったところの福音を通しての他は、このような信仰はやってこない。そして、この神の子キリストは我々のために十字架で死に、かつ甦った人である。」

●肉と霊

それから、パウロが「肉」（フライシュ）と「霊」（ガイスト）というものをどういうように使っているかということを言っている。

「パウロは、生まれつきの我々全体を肉という。それは身体も魂も理性もいろいろな感覚も全部ひっくるめての話だ。」

はっきりしてるよ、ルターは。

「魂や精神はなかなか良くたってダメなんだ。それでできるなら、やってごらん。もう自分は散々やったけれども、ダメだった」

と。修道院の生活は彼は模範僧だった。模範僧のようにやったけれども、ちっとも本当はうれしくない。ルターというのは、

「立派な修道僧だなんて、何が立派か」

と自己批判しているわけだ。本当の楽しみも生命も来やしない。だから、生まれつきの人

間というものは、もうこれは全部「肉」なんだ、「罪」なんだという。

ということは何かというと、肉は自己中心なんだ。どんなに善さそうにみえても、それは自己中心、己が中心になっている。エゴイスト。エゴイストの親玉はサタン。神抜きで自己中心は、これはサタンです。だから、生まれつきの我々はサタンの配下にいる。

それから神の配下に、自己中心から神中心へ移らなければならない。神中心はキリスト中心です。これを「霊」という。これははっきり、ルターが言っている。自己中心は全部、「肉」。神中心は全部、「霊」。だから、どんなつまらないことをしていても、神中心で生きている人は霊的である。御飯を食べるその気持にしてもそうだ。単なる健康のために健康をはかることは、これは自己中心です。神さまの御用のための器だからといって自分というものを大切するのは、これは霊なんです。同じ肉体に対しても、そうなんです。

「私は神さまの御用の器だ。御用器なんだ」

と、この自覚であるときはそれで身体を鍛えているならば、それは霊的なんです。ところが、

「とにかく長生きしよう、健康で楽しくやろう」

なんて言って自己中心なのは、これは肉なんです。同じく身体を鍛えていても、質が違う。霊と肉の大きな分かれは、徹底的な分かれはそれですから。いわゆる肉情が肉だというのではない。肉情だって、それは神さまの御用にたつために、必要に神さまはつくっているんだから、いろいろと。人間をそのように創っていらっしゃるんだ。神さまの創ったものはみんな善からざるはなしだ。それがどのような意識において用いられているかというところに問題がある。

「不信仰は最も霊的な罪である。……

キリストを受けとらない、神さまを受けとらないことは最も霊的な罪であるという。

内的であろうと外的であろうと、聖霊によって生きている生き方は、全部これを霊という。」

と、ちゃんとはっきり書いてある。霊的という言葉はいわゆる神秘を言っているのではない。信仰の世界の神秘はまた別な意味で大事なことですが。

それやこれやでもって、カトリックの儀式の仕方、またその構造に対してナイン（否）と言ったのは、このルターは自己批判であった。我々は絶えず自己批判しながら、己を乗り越えていく。我々は己を乗り越えて進んでいく。

「人間というものは自己に対して打ち克たれるべきところの存在である」

と。これはニーチェの言葉です。自己を乗り越えて、どしどし己無き者になって、キリストと一つになっていく。これは努力でやるのではない。上からの力で、光でやらされる。

『ロマ書序文』のごく一部をちょっとご紹介したにすぎませんけれども、ルターの『クリスチャンの自由』と『ロマ書序文』は、あなた方はとにかくドイツ語でなくていいから、必ず一遍お読みになるといい。

ウェスレーも結局、聖霊の体験をして――モラヴィアンの影響がきたんです――彼はアメリカから帰るときの船の中で嵐にぶつかって、そこで回心の世界に入った。そのウェスレーの隠れた力はお母さんの祈りであった。女性はかくれて本当に歴史をつくる。そういう意味で、女の方の魂は非常に大事なものです。とにかく、

「恵福なるかな、キリストに圧倒される者」

ということ。キリストに圧倒されて生きてください。

●詩「人は誰しも」

召団讃歌A55「人は誰しも」（１９８９年8月20日作 中山晋平作曲「さすらいの歌」の曲で）

1　人は誰しも　長所と短所よ
　互いに美点　みとめ合い
　落度見棄てて　交りゆけば
　雲は遁げゆき　陽は光る
2　人は誰しも　躓くものぞ
　されど互に　ゆるし合い
　交るところ　喜びが湧く
　そこに花咲き　鳥歌う
3　人は誰しも　ドラマの中ぞ
　不遇の時に　思い遣り
　愛し労り　助くるところ
　天の涙に　虹が立つ
4　人は誰しも　噂や陰口で
　パリサイになる　虐れあり
　かかるときしも　十字架のもと
　語り合うこそ　いと善けれ
5　十字架の贖罪に　救はれし我
　うちに聖霊の　力あり
　さればいかなる　誹謗も迫害も
　忍び荷いて　祈りぬく
6　十字架はイザヤ書　五三の預言
　聖霊はイザヤ書　三五の現実
　これぞキリスト！　この主にいつも
　祈り入りてぞ　生き貫かん
7　自然も国土も　神の有ぞ

個人(ひと)も国家(くに)も　使命あり
然るに慾の　渦巻(うず)きのため
サタンは世界を　掌(て)の中に
8　人は誰しも　救済(すくい)を要する
つみびとならずや 世の人よ
神の御前(み)に　平伏さざれば
いつか世界は　大破局（カタストローフェ）！

●参考「キリスト者の自由　聖書への序言」

「キリスト者の自由　聖書への序言」（岩波文庫 石原謙訳）

「これに反して「律法をみたす」ということは、あたかも律法も刑罰もまったく存しないかのように、喜びと愛とをもって、律法の命じる行いをなし、律法に強制されずに自由に神の御意にしたがい、善く生活することである。しかしかような自由な愛から出た希願は、聖パウロが第五章に述べていくように（五節）、聖霊がこれを心に与えたもうたのである。ところが霊は、彼が序詞のうちに説いているように、ただイエス・キリストに対する信仰において、これとともに、またこれによってのほかには与えられない。しかしその信仰はまったく神の言により、すなわち第三章（二十一節）、第四章（二十四節以下）及び第十章（九節）にキリストについて語られているように、神の子にして人であり、われわれのために死にまた甦りたもうたところのことを説教している福音によって、初めて来るのである。……

「肉」と「霊」とについてはここで、あたかも肉とは単に不品行にかかわり、霊とは心のうちの内的なものにかかわるかのように、解せられてはならない。そうではなく、聖パウロは、キリストがヨハネ伝福音書第三章にすべて肉によりうまれたものと言われたように（六節）、身体とたましい、理性とすべての感覚とをそなえた全人間を肉と称しているのである。つまり人間におけるすべてが肉に従って営まれているからである。……またローマ人への手紙第八章には肉によって律法が弱くされることを述べているが（三節）、それは単に不品行についてではなく、あらゆる罪について、なかんずく最も霊的な罪悪と認められる不信仰について語っているのである。

反対にまたあなたは、例えば弟子たちの足を洗いたもうキリストや、舟を操って漁りしたペテロのように、最も外的な行いに携わる人をも、霊的と呼ぶべきである。したがって肉の益となり地上的な生活に奉仕することのために、内的にもまた外的にも生活し且つ労する人が肉であるように、霊と未来の生活とに奉仕することのために、内的にもまた外的にも生活し且つ労苦する人を霊と称するのは当然のことである。」